

カッパのレイライン初巡礼

雨の少ない塩田平には、ため池が多数あります。このため池群は塩田平が「塩田三万石」と呼ばれる穀倉地帯になるために大きな役割を果たし、大事にされてきました。

昔々、その一つの甲田池にカッパの家族が住んでいました。人間なら七、八歳になる子カッパのたつ坊は、まだ甲田池の周りだけで、池の外をあまり知りません。たつ坊が外に出てみたいと駄々をこねるので、お母さんカッパがお父さんカッパにお願いしました。

「あんだ。たつ坊を外に連れておやりよ」

「連れていかねえよ。池の中でもわがままで、最近はおも達者になって厄介だつていうのに、外だと人間に見つかるかもしれないんだから、危なっかしくてしょうがねえ」

「それが今日は人間たちが塩田平にはほとんどいないんだよ」

「なんでいないんだい？」

「なんでも上田城に行つてお殿様にお願いごとをするらしいよ」

「そうなんだ。それでも連れてかねえ」

「そろそろ外を見させるのもいいと思うよ」

「連れて行かねえ」

なんてやりとりが何回かあつて、お母さんカッパの口調がだんだんと強くなります。

「私だつて、たまにはゆつくりしたいんだよ！」

お父さんカッパは、それに気圧されます。

「わかつたよ。しょうがねえな」

「ほら、たつ坊。お父ちゃんが外に連れていつてくれるつて」

「やったあ！ 行つてみたいところがあるんだ」

お母さんカッパが外にいけることをたつ坊に告げると、池の中なのにわかりやすく飛び跳ねて喜びます。心配になったお父さんカッパは釘を刺します。

「外には人間がいるんだから、お父ちゃんのいうこと聞くんぞ」

「うん。お父ちゃんのいうことを聞いていい子にしているよ。任せて」

「男と男の約束だからな」

「わかつた。男同士だもんね」

「あんだは外ではお酒を飲まないんだよ。酒癖が悪いんだから」

「わかつているよ。約束だ」

そんなこんなでお父さんカッパは、たつ坊を連れて池の外に行くことになりました。

「たつ坊、どっか行きたいところもあるのか？」

「うん、何でも塩田平にはレイラインっていうものがあつて、人間がそれをありがたがつているつて聞いたから、レイラインには何があるのか見てみたい！」

「余計な入れ知恵をする奴がいるなあ」

「碧くんって言って、最近できた友達だよ」

レイラインとは、お寺や神社などが一直線に並ぶことです。塩田平のレイラインは夏至の朝日が照らす光の線の上に信濃国分寺、生島足島神社、別所温泉などが並んでいます。お父さんカップパとたつ坊は、まずはレイラインの東に位置する信濃国分寺に行くことにしました。信濃国分寺は、天平十三年（西暦七四一年）の「国分寺建立の詔」によって上田に造られた歴史あるお寺です。気持ちが高まり今にも駆け出しそうなたつ坊にせかされて、足早に甲田池から東に向かうと信濃国分寺が見えてきます。

「ほら、ここが信濃国分寺だ」

二人は立派な仁王門をくぐって境内に進んでいき、本堂に向かいます。本堂前には本尊の薬師如来像を御開帳する際に五色の糸や布ひもで結び、参拝者が柱や布ひもに触って心身の健康を願う開帳柱があり、その奥に荘厳な本堂が建っています。

「うわー、お寺ってすごく立派だね」

たつ坊は初めて見るお寺に興奮して飛び跳ね、興味津々でお父さんカップパにいろいろ聞いてきます。

「信濃国分寺にお参りするとどんないいことがあるの？」

「ここのご本尊は薬師如来様だから、疫病厄難除けとか、病氣平療とか、たくさんだ」

「じゃあ、なんかいいことあるね。本堂に彫刻だったり、蔵にこて絵だったり、龍が描かれているね」

「塩田平は雨が少ないから風雨が引き起こす災いからは守られているけど、その代わり深刻な干ばつが起きることもあるからな。だから、水を司る水神である龍を崇めて、大切にしているんだ」

「龍を探すのは、隠れなんとかを探すみたいで楽しいね。あつ、わかった。龍が大切だから、おいらの名前は『たつ』なんだね」

「いや、酔っぱらって寝てたら龍に食われる夢を見たから、正夢にならないように龍神様にごまをする意味で付けたんだ。へへへっ」

「聞いてないよ」

「言っただけだったか？」

「そんな理由だと、おいらグレルぞ」

「まあまあ、レイラインに興味があるなら、信濃国分寺の三重塔を見ないと。源頼朝公が発願といわれる由緒ある塔で、大日如来様が安置されているんだ。大日とは、『大いなる日輪』で太陽のことだ。この塔がレイラインの起点と考えられているんだ」

「お父ちゃんさつきからすごいね。初めて尊敬したよ」

「初めてってなんだ!？」

「カップパなのに、なんでそんなに詳しいの？」

「カップパだけど大人の事情ってやつがあるんだ。誰かが説明しないと話が進まないからな……」

「遠い目をしてる。カッパでも大人って大変なんだね」

池の中に住んでいて高い建物を見たことがないたつ坊は、見上げて圧倒されてしまします。

「それにしても三重塔は高いな。詳しいことはわからないけどかっこいいや。あっ、あれはなに？」

「石造多宝塔だな」

たつ坊が指さした石造多宝塔は、その名の通り石で作られた多宝塔で大日如来様を具現化したものとされています。信濃国分寺のものは高さ五尺ほどでやや小振りです。

「塔身が削れたりくぼんでいたりするのは、粉にして飲むと病気が治るとか、お守りにするといいわれているからだ。一番の上の相輪なんか、もうあめ玉くらいの大ききしか残っていないな」

するとたつ坊が、おもむろにあめ玉のような相輪をパキッと取って口へ。石造多宝塔の相輪がなくなっていました。

「おい、そのまま食べるやつがあるか！粉にするんだ」

「んん〜」

「のどに詰まったのか？おい、大丈夫か？」

「んんっ」

お父さんカッパがたつ坊の背中を叩いたり、頭の皿の水がこぼれないようにしながら格闘すること一〇分ほど。

「はー、なんとか出てきた。飲むのはやめて洗ってお守りにしよう」

「カッパだから呼吸できなくても平気だけど、人間なら死んでるぞ」

「お父ちゃん、そういうことがあった時にいうおまじないも碧くんに教えてもらったんだ」

「どんなおまじないだ？」

「『特別な訓練を受けています。良い子は絶対にマネしないでね』。このおまじないを唱えておけば大丈夫って言ってた」

「なんだそれ。訳のわからないことを言う友達だな」

「おいらたちはカッパなんだから、人間の常識は通用しないってことで」

「とにかく、人間に見つからないうちに次に行くか」

「うん。ところでお父ちゃん、今日のおいらはなかなかいい子だと思うけど、どう？」

「喉に相輪を詰ませたりしているけど、いまのところはわがママを言わないでいうことをきいていい子っていえばいい子だな」

「そこでどうでしょう。そのいい子だなんていう思いを形で表すっていうのは？」

たつ坊は急に猫なで声でお父さんカッパの顔を覗き込み甘えます。

「始まったな。形に表すってどうするんだ？」

「おいらが食べたことがない人間の食べ物が食べたい」

「人間に関わらないといけなくなるから、危なっかしくてダメだ」

「なんでも、国分寺の近くですしっていうおいしいものが食べられるらしいよ」

「ダメだ。今日はお父ちゃんのいうことを聞く約束じゃないか」

「お父ちゃん、何年親をやっているんだよ。甘いよ。子どもとの約束なんてそんなもんだろ」
「居直るんじゃない。ただの約束じゃない、男と男の約束だって、そういうったろ」

「男と男の約束なんていうのも、もう古いよ。そんなこといっていると世間様に叩かれるぞ」
「お前はいつの時代のカッパなんだ。それにすし屋なんてどこにあるんだ？」

「あれ、おかしいな、国分寺の近くにすし屋があるって話を聞いたんだけどな。まあ、しょうがない次に行こう！」

カッパの親子が千曲川を渡って一山超えてくると生島足島神社の大鳥居が見えてきます。人間の足なら時間がかかりますが、カッパの足ならすぐ着きます。たつ坊がいったように人間の常識は通用しません。二人が訪れた生島足島神社は、平安初期にまとめられた「延喜式」にも載っている古社で、万物を生み育て生命力を与える神の生島大神と、国中を満ち足らしめる神の足島大神を祭神としています。御神体は「大地」であり、日本列島の真ん中に鎮座しています。

「今度は初の神社だ！ 鳥居があつたり、お寺とはまた違う感じだね。でも、お寺と神社は何が違うの？」

「すごく簡単にいうと仏様をお祀りするのがお寺で、神様をお祀りするのが神社だな。ここ生島足島神社は、夏至に太陽が東の鳥居の真ん中から上がり、冬至には西の鳥居の真ん中に沈むように配置されている。まさにレイラインの中心となる神社なんだ」

生島足島神社は、神池に囲まれた神島に本殿が建つという日本でも最古の形式の一つで建物が配置されています。橋を渡ってお参りすると、たつ坊はキョロキョロしていますが、カッパだけあつて池の方が気になります。

「この池は、なんか住みやすそうな池だね」

「神池はいい池だけどダメダメ。この境内には大蛇のやつが住んでいて落ち着けたもんじゃない。大蛇のやつがいるから、蛙（かわず）も住んでないんだぞ」

「本当？」

そういうとたつ坊は、ドボンと池に飛び込んでしまいました。カッパなので水の中はお手のもので自由自在に泳ぎ回ります。

「たしかに蛙はいないみたい。それに水の色も日の当たり方で色が違って見えて不思議だな」

「色が変わる理由はお父ちゃんもわからないな」

「あつ、あれなあに？」

「それは家族樗っていつて、一本の親木から子木が生えている大木だな」

「じゃあ、大きいのがお父ちゃん、次がお母ちゃん、小さいのがおいらだね」

そういうとたつ坊は、小さな樗の木に登り出します。

「おいつ、危ないぞ！」

お父さんカッパが注意するのですが、小さな櫂は重さに耐えきれずにボキッと乾いた音がして幹の途中から折れてしまいます。たつ坊は折れた木と一緒に落ちますが、身軽に着地してケロッとしています。

「あれ、折れちゃった」

こうして家族櫂の一本は途中から折れてしまったのです。ですが、たつ坊は気にする様子はなく、次に目が移ります。

「この大きな石は？」

「それはイボ石だな。上のくぼみに溜まった水をつけるとイボがとれるらしい」

「試したい。お父ちゃん、イボない？」

「そんな都合よくイボはない」

「おしりには？」

お父さんカッパがおしりの辺りを何やらさすると、その目が光ります。

「ここじゃあ、なんだから。持って帰ろう」

どこからか竹筒を取り出して、中の水をイボ石の水に入れ替えます。どうやら持って帰って試すつもりようです。いろんなものが物珍しかったつ坊は、偶然にも生島足島神社の七不思議に興味を示していきます。

「こっちには根元の太い大きな木があるよ」

「それは夫婦櫂だな。それを参拝すると子宝に恵まれるらしい」

「洞がある。中はどうなっているんだろう？」

「こら、子どもは見なくていい」

「どうして」

「まだ早い。大人になったらな」

「……わかった。今日はいうことを聞くって約束だから」

「わかればいいんだ。いい子だな」

「ねえ、いうことを聞いたから団子買って」

たつ坊が指さす先には串にささった団子の形をした看板があります。見た目はよくある民家に見えますが、団子を売っているようです。

「買^かわず。買^かわ^ずったら買^かわ^ず！」

「ここにはかわず（蛙）はいないはずだよ」

「そもそも人間に見つかるだろ」

「大丈夫。団子屋のおばあさんは目が悪いから、人間かカッパかわからないよ。碧くんが言^つつた」

「ダメなものはダメ」

「なにも団子屋を買ってくれ、千本、万本がほしいっていつてるんじゃないよ。たった一本、

たった一本でお腹も心も満たされるんだから」

「一本でもダメ」

「それじゃあ、団子一本買うと家庭が崩壊するほど家計が苦しいの？ お父ちゃんにはそんな甲斐性もないの？」

「そんなことない。家にはきれいなお膳がたくさんあるじゃないか」

「じゃあ、お金があるなら、そこは使うべきだよ。こういうところでちよつとずつ使うから景気が良くなるんだよ。おいらは日本のために思っ、団子を一本ほしって言うてるんだ」「経済を理由にするな。買わずっていったら買わず！」

「たかだか団子一本のせいで大好きなお父ちゃんを嫌いになりたくない。かといって団子を恨むのも筋違い。団子一本で親子の絆を断ち切られるなんて悲し過ぎる……。ううっ」

目元を腕で覆って泣き声を漏らすたつ坊の顔を、お父さんカッパはのぞき込みます。

「おい、涙が出てないぞ」

「ちえ、なんて了見の狭いお父ちゃんなんだろう。そろそろ面倒なことになるよ」

「おまえ、親を脅す気か？」

たつ坊は、さっと草むらに身を隠すと大きな声で叫びます。

「カッパが出たぞー！」

叫び声を聞いて大蛇がニョロニョロ、座敷童がトコトコと出てきますが、人間は出てきません。やはり人間は出払っているようです。妖怪たちが出てくるのを見たたつ坊は、ここぞとばかりに妖怪たちの前に出てきます。

「お集りのみなさん、団子の一本ぐらい買ってやってもいいと思いませんか？」

「おい、こら！ 世間を味方にしようとするな」

大蛇は人間がいない静かな日を邪魔されたのが気に食わないらしく、不機嫌そうに言い放ちます。

「団子の一本ぐらい買ってやればいいじゃねえか」

「よっ、大蛇の旦那！ おっしゃる通りです」

「やったー！」

大蛇に頭が上がらないらしいお父さんカッパは、太鼓持ちのように同意して団子を買う羽目になってしまいました。ニコニコして見ていた座敷童は団子屋に住み着いているらしく、たつ坊に手招きしながら団子屋に入っていきます。追うように二人が入ると、小柄で白髪のおばあさんが座敷にちよこんと座っています。

「いらっしやい」

おばあさんは、カッパが入ってきてても動じないで迎えてくれます。

「どうやら、本当に目が悪いみたいだな」

「だから大丈夫って言ったろ」

おばあさんの前の棚には、団子が五、六本置かれています。

「なんで人間が出払っているのに商売しているんだ？」

「ほら、お父ちゃん、あそこの一番大きい団子がほしい」

ぶつぶついうお父さんカップをよそに、たつ坊が指さしたのは、少し離れたところに置かれている大きさが普通の団子の十倍ほどで、大人の握りこぶしぐらいの団子が三つ刺さった巨大団子でした。

「大きければいいってもんじゃないだろ。大きいと大味になるし、普通の方がうまいぞ。それにあの大きさはいくらなんでも見本だろ。見本に決まっている。なあ、おばあさん、あれは売りもんじゃないだろ？」

「売りもんだよ」

結局、お父さんカップは、大きさが十倍なら値段も十倍の団子を買うことに。

「まいったな。たかだが団子一本ってことだったのに。一杯飲まなきゃやってらんねえな」

「おいしくてふるえるよ。そうだ。おばあさん、これあげる。なんでもこれを削って飲むと病気が治るんだって。きつと目も良くなるよ」

「そうかい。ありがとうね」

たつ坊は粉にして飲むと病気が治ると伝わる石造多宝塔の相輪をおばあさんに握らせてあげました。たつ坊が一口では食べきれない巨大団子にかぶりつきながらお店を出ると、一足先に外に出ていたお父さんカップがどこから出したのか、ひょうたんを傾けてお酒を飲んでいました。

「お母ちゃんと外では飲まないって約束したろ」

「子どもだけじゃない、大人の約束だってこんなもんだよ」

たつ坊は団子をほおぼりながら、お父さんカップは一杯ひっかけながらレイラインを西に進みます。途中、外壁の色も古びて歴史を感じさせる小さなお宮、泥宮に立ち寄ります。

泥宮は「大地（泥）」を御神体としている珍しいお宮です。

「おいらたちが住んでいる甲田池の近くに、こんな小さくてかわいいお宮があったんだ」

「泥宮は小さいけど、御神体が同じ大地の生島足島神社と深い関係があって、生島足島神社の西鳥居とまっすぐな道で繋がっていたらしいし、レイライン上にあるんだぞ」

「じゃあ、おいらたちはレイラインの近くに住んでいて、御神体の泥にまみれて毎日暮らしているってこと？」

「そういうことになるな」

「じゃあ、ご利益があってもいいよね」

「肌がきれいになる。肌がいつも潤って乾燥知らずだから、スベスベツルツルだぞ」

お酒が入ってご機嫌なお父さんカップは得意気に美肌を自慢してきます。

「触ってみるか？」

「おいらもそうだい。池に住んでいたら、そうなるに決まっているよ。もっとすごいご利益がほしいし、人間たちは御神体と暮らしているおいらたちをもっと大切にしたいものに

ね」

「そうだな。カッパは地域によっては水神の末裔ともいわれているから、もっと大切にされてもいいよな。うんうん。たつ坊、お前はあの誇りを忘れずに人間に一目置かれる立派なカッパになるんだぞ」

「お父ちゃんは、この話になると長いんだよな。今日はここまでしておいてよ。あと、この話をした時は、碧くんに教わったおまじないをいっておいた方が良さそうだな。カッパについては『所説あります』。これでよし!」

そんな話をしながらカッパの親子は甲田池の近くを通って、レイラインの西に位置する信州最古の温泉といわれる別所温泉にやってきました。「信州の学海」と呼ばれて信州における学問・宗教の一大中心地となっていた別所温泉は、長楽寺・常楽寺・安楽寺の三楽寺など多くの寺院が集まります。

その中でまず向かうのは北向観音堂です。北向きの本堂は全国でも珍しく、長野市にある南向きの善光寺本堂と対峙しています。来世の極楽往生を願う善光寺、現世での現世利益を願う北向観音堂に両参りして、現世と来世の二世に渡っての幸せを願うのです。

二人が参道の階段を昇ると、北向観音堂が見えてきます。南をお堂と木々に遮られているせいか、少し肌寒く感じますが、たつ坊が手水に触れてみると。

「あつたかい」

「温泉の源泉が湧き出しているんだ。手を嗅いでみたら、硫黄の匂いがするぞ。硫黄いおうと言おう。ぶぶぶっ」

「お父ちゃんの悪い癖が出た。酔っぱらうと駄洒落をいって一人で喜ぶんだから。でも、本当だ。硫黄の匂いがする。カッパは温泉につかっても大丈夫?」

「世の中には日本酒を飲んで温泉に入るカッパもいるみたいだから大丈夫だろう」

北向観音堂に到着するまでにお父さんカッパはすっかりできあがっているようです。そして、二人は今日四度目のお参りをします。

「カッパの現世利益ってなんだろう?」

「人間と仲良く暮らして、キュウリと尻子玉を山ほどももらうことかな。キュウリが給料(きゅうりよう)。カッカッカッ」

「それ最高だね。そうしたら人間の子どもといっぱい相撲をとって負かしてやるんだ」

「そのためには善光寺もお参りして両参りしないと。善光寺は全工事(ぜんこうじ)。ひゃひゃひゃ」

たつ坊は慣れたもので、お父さんカッパのダジャレはないものとして会話を続けます。北向観音堂には「善光寺だけでは片参り」のいわれを伝える絵馬なども飾られています。

「龍が描かれた絵馬もあるね」

「よく見ろ。その龍は古銭を使って描かれているだろ。古銭は越せん」

「塩田平には本当に龍がたくさんあるなあ」

続いては常楽寺です。平安時代初めに開創と伝わり、多くの僧が学んだ「信州の学海」を支えたお寺です。本尊の妙観察智弥陀如来様が安置された本堂は、茅葺の建物で趣があります。カツパの親子はお参りを終えると、本堂の脇を抜けて木々に囲まれた苔むした道を進みます。すると常楽寺の石造多宝塔が見えてきます。

「信濃国分寺の石造多宝塔よりも高いし、どっしりしているね。でこぼこもないや」
「削って飲むと病気が治るとかのいわれがないからな。もう相輪を取るなよ」

信濃国分寺の石造多宝塔を見てきたたつ坊は、違いが気になるようですが、今度は相輪を取ったりしません。そして、重厚な石造多宝塔を囲むようにいくつか塔が並び、どれも苔むしています。また、常楽寺は北向観音堂の本坊でもあり、石造多宝塔が建てられているところは北向観音の出現地と伝わり、神聖な地として厳かな空気を感じます。

「多宝塔をここにも建てるなんて、太陽に対する思いがすごく強いんだね。ほかにも塔があるけど、これも多宝塔？」

「ほかのは多層塔で、『里帰りの多層塔』と呼ばれているな」
「里帰り？」

「一度行方不明になったけど、見つけた後に返してもらったんだ。大事なものはちゃんと持ち主に返さないとな。返還しないといかん。たつ坊、悪いことをしたら閻魔様に罰せられるぞ。いいことをして閻魔様と円満（えんまん）に。ぶぶっ」

お父さんカツパとたつ坊が、次にやってきたのは別所神社です。雨が少ない塩田平では、水源となる山々や神を崇めて恵みの雨を願う雨乞いの祭りである「岳の幟」が行われます。

「岳の幟」では、夫神岳山頂に祀られた「竈」と呼ばれる九頭龍神を、この別所神社までお連れするのです。二人は、神楽殿を右手に見ながら本堂へと進んでいきます。

「たつ坊、お参りの道は一度でも参道（さんどう）。ぶっ」
「誰もいないね」

「今日は祭りじゃないからな」
「今度は祭りの時に来たいな」

「幟は天から下る龍をかたどっていて、色鮮やかできれいだぞ。お父ちゃんも人間がいついだから、近くで見たことないけど離れて見ているもきれいだっただぞ」

「いいな、見たいな。あつ、別所神社にも龍の彫刻があるよ。塩田平では本当に龍が身近

なところにいるね」

「水を大事にしている証拠だな。塩田平の人々は龍りゅうと生きる流りゅう(りゅう)派。ぶぶぶ」

お父さんカップが千鳥足になって足元がおぼつかなくなりつつも、二人で神社本殿の周りを巡って建物を飾る彫刻に龍の彫刻を見つけたのです。また、別所神社は高台にあり、塩田平を見渡せる位置には神楽殿が建っていますが、舞台の後ろの壁が吹き抜けになっていて、塩田平の景色を借景として額縁に入った絵画のようにも見えます。

「きれいだね。あれが、おいらたちが住んでいる甲田池かな？」

「今日はよく歩いたし、景色がいいから酒がうまい」

そういうとお父さんカップは、またひょうたんを傾けてお酒を飲みます。

最後にカップの親子は安楽寺を訪れました。安楽寺は長野県で最古の禅寺であることで知られ、本尊は釈迦如来様です。威風堂々とした本堂をお参りして、さらに奥に入っていくと木立の中に続く階段の先に木造八角三重塔が見えます。現存する日本唯一の木造八角三重塔であり国宝にも指定されている塔には、信濃国分寺の三重塔と同じく大日如来様が安置されていて、レイラインを繋ぐ意味でも重要な塔なのです。ただし、木造八角三重塔にたどり着くには、長い長い階段を昇らないといけません。

「たつ坊、安楽寺で一番怖い場所を知っているか？」

「えっ、どこ」

「かいだんだ。ぶぶぶ」

足元がおぼつかないお父さんカップを心配したたつ坊は、背中を押してやります。お父さんカップは、「これは楽だ」なんていつてご機嫌です。

階段を昇り切ると安定感と崇高美、華麗さを備えた塔が青空に向かってそびえています。「すごいな。カップのおいらだって、この美しさはわかるぞ。それにしても、なんで大日如来様を安置した三重塔とか、多宝塔とか、太陽を関するものこんなにいっぱいレイライン上に配置したのかな。昔の人は何を伝えたかったんだろう？」

「それはお父ちゃんもわからないな。その謎を解くのは人間たちで、すぐには解けなくても子どもたちに託されて繋がっていくよ」

「そうだね」

「たすきをたくす。ぷっ」

「そのダジャレは無理があるよ。せっかくいいこと言ったのに台無しだし……」

レイライン上の神社仏閣を見てきたカップの親子は、帰路につきます。「塩田三万石」といわれるだけあって田園風景が広がりますが、帰路の途中には鯉がいる池も。そこでお父さんカップは、ふと思いつきます。

「今晚の酒の肴に鯉でも取って帰るか。さかなだけに。へへ」

「……酔っているんだからやめなよ」

「酔ってない。酔ってない。それにお父ちゃんは鯉取りが得意なんだから。どんとコイ」

そういうと池に飛び込むのですが、やはり酔っていていつも通りいきません。足元がヨロヨロしているので、ビチビチと暴れる鯉をあと一歩のところまで取り逃がしてしまいます。たつ坊にはなんだか遊んでいるようにも見えます。

「なんか楽しそうだな。お父ちゃん、おいらにもやらせてよ」

「そこで見てろ。こういうのは大人に任せておけばいいんだよ」

「やらせてよ」

「いいから任せとけ！」

威勢のいいことをいったお父さんカップですが、結局は鯉を取り逃がしてへたり込んでしまいました。

「鯉取りはやらせてくれないし、逃がしちゃうし、だらしないな」

「たまたま今日が調子悪かっただけだ。だらしくないぞ。おつ、見ろ。あそこの土手に馬が繫いであるぞ。予定変更、馬を池に引きずり込んで、今夜は馬肉が肴だ。馬はうまいからな。へへへ」

「……やめなよ。鯉も捕まえられないのに、馬なんて無理だよ」

「無理じゃない。見ていろよ」

お父さんカップはそろそろと馬に近づくと首に腕をまわして池に引きずり込もうとします。ところが驚いた馬が暴れるとお父さんカップの手が手綱に絡まり、急いで馬屋に帰ろうとする馬に引きずられてしまいます。

「お父ちゃん！ 待って」

たつ坊は慌ててお父さんカップを助けようと追いかけますが追いつけません。しかも、途中でお皿の水がこぼれてしまったお父さんカップはもう力が出ません。外の騒ぎを聞きつけてお百姓さんが馬屋までやってきます。

「これはたまげた！ 馬がカップを連れてきた！」

「お皿の水がこぼれて力が出ません。助けてくれれば、この家にお祝いごとがある時にはお膳を用意してさしあげます」

お百姓さんは、お父さんカップの言葉を信じて絡まった手綱を解いて皿に水を注いで助けてくれました。たつ坊は人間に見つからないように隠れて、その一部始終をあきれて見ていました。

「こんなことなら、お父ちゃんを外に連れて行ってやるんじゃないかった」